

第11回「ハンガリー旅の思い出」2014年コンテスト作品

中島裕司さんの作品

ハンガリー旅の思い出

たとえば、非常に不愛想で近づきたい人間が、ちょっとしたきっかけで、話をするとすごく優しく親切だったりする。反対にいつも愛層がよくて、言葉巧みで優しくそうな人が、困った時に知らん顔ということもよくある。

ハンガリー人は前者であると思う。ハンガリーは不思議な国だ。いろいろなヨーロッパの国々を旅したが、ハンガリー人は他のヨーロッパ人とは少し違っていった。たぶん心の底はすごく明るく親切であるのに、ふるまい方が何か不愛想で取っつきにくいというか、冷たい感じがした。ずいぶん前に行った国のことをわざわざ書こうと思ったのは、現在ハンガリーと非常に深く関わりを持つことになり、これからも何回もハンガリーに行くであろうし、最初は嫌いだったハンガリーが、今や大好きで、常に心の中にあるからである。ちょっとした思い込みから、よい印象を持たなかったハンガリーが、関わりが増えて、中身がわかってくると、いい国であり、いい人が多いと思うようになった。

要するにハンガリー人は真面目で、恥ずかしがりやであるのだ。恥ずかしがりの国民性とおそらくソヴィエト支配時代の社会主義的な対応の仕方がそのまま国民の生活の中に入っていたために、観光客にはマイナスイメージを与えていたと思う。

ずいぶん前にハンガリーに行った。ウィーンから列車に乗ると3時間ほどでブダペストに着く。往復6時間、日帰りも可能だ。私がハンガリーに行った時は、中央ヨーロッパ付近に熱波が襲い、恐ろしく暑い時期であった。

その時まで経験したことが無い猛暑であり、日本で普段から冷房に慣れている者にとっては死ぬと思うくらい辛かった。

列車の中での話。当時、ハンガリーの車掌は非常に不愛想であった。会った車掌が皆そうであったから誇張ではない。笑顔が全くない。列車の発車時間もいい加減で、プラットホームの変更も突然であった。日本ほどきちんとしている国は少ないから、別に腹を立てることもないことかもしれないが、熱波のために、怒りがピークに達しているところに、列車内は冷房を切ったまま。何度も車掌にエアコンのことを言っても、杓子定規な返事に冷たい態度。腹が立つから、日本では考えられないけど、上半身裸になった。ヒンシュクものである。それほど苛立っていた。市街で店に入る。やはり店員に笑顔はないし、売買も事務的な感じであった。日本の店員の対応に慣れているから、売りたくないなら、店を閉めればいいのかと思ったこともあった。

帰国して、ハンガリーの印象は聞かれたら、暑いとか事務的、社会主義的国家(実際はそうではない)とかの言葉が思い浮かぶだけであった。

しかし、ソヴィエトから離れて何十年たち経ち、ハンガリーは変わった。ハンガリーに行ったいろいろな人から、感想を聞くと、「ハンガリーはすごくいい国」「ハンガリー人は親切で思いやりがある。温泉もあるし、日本人とつながっている感じがする」等。私も今は、そのように思う。実際、ハンガリー人に会ってみて、楽しくて明るい真面目な人が多い。

ひょんなことからハンガリーとの交流の手伝いをしてほしいと依頼されて、引き受けることになったのだが、引き受けてしまった以上、多少なりともハンガリーのことは勉強しなければならないし、ハンガリー人とも会う機会も増えるだろうし、前向きに考えだした。

ブダペストは「ドナウの真珠」といわれるくらい美しい。小高い所にある旧市街からドナウ川を挟んで見渡す町は、情緒にあふれて言葉を忘れるくらい素敵な街である。何時間もじっとしていたいくらい美しい。

もし、爽やかないい季節に訪れていたら、ブダペストって最高だと思うくらいいい街だ。正直、景観の良さは天下一品である。あの車掌の態度も店員の不愛想もそんなに気にしなかったはずだ。異常な熱波に頭が少々おかしくなっていたに違いない。

鳥瞰的に見て美しいブダペストの街は歩いていても、情緒いっぱい素晴らしい街である。建物がいい。絵を描く人間にとって、ロケーションは最高である。私も暑い中、何枚かスケッチをした。



ハンガリー人は、フィンランド人同様、ヨーロッパにありながら、民族的には、アジア人の血が流れている。他の共通点はソ連という大強国の支配にあって苦難の歴史を持っている。私はフィンランドには何回も行った。自然が美しく夏でも涼しい。ハンガリーのことを書きながらフィンランドを思い出した。そういえば、フィンランド人もはにかみ屋さんが多かった。アジアの血が流れていると聞いたときは、すごく親近感を覚えたものだ。

最近が変わったが、昔は日本人も控えめな国民として知られていた。

そのように考えると、あの時の店員とか車掌は恥ずかしがり屋だったのである。熱波でイライラしていて私の判断がくるったとしか考えられない。

最初は渋々引き受けたハンガリーとの交流の仕事も、冷静になって考えれば、ハンガリーって、なんていい国だと思うようになった。実際、ハンガリー人と会って会話すると、皆さん明るく真面目で親切な人が多い。ハンガリー語は非常に難解であるが、“Yo Napot Kivanok”（こんにちは）と挨拶するとハンガリーの人は満面の笑みを浮かべて“Yo Napot Kivanok”と返してくれる。いい人が多い。次回ハンガリーに行くのが楽しみである。あの熱波のハンガリーから何年経っただろうか。ハンガリーもソ連から離れて半世紀が経過し、社会的のもずいぶん変わった。もちろんはにかみやであるのは国民性だからそのままと思うが、「巧言令色、少なし仁」のことをよくわかっている国民性であるとも思う。言葉は少ないが心は温かい。私も気持ちに余裕ができた。いい季節の時に、何度も「ドナウの真珠」を見たい。

旅の思い出となると、大抵は、「きれい」「素晴らしい」「親切」など肯定的でプラスイメージの話になるが、ハンガリーの旅の思い出は、私の場合は否定的でマイナスイメージから、帰国後、冷静的に客観的に見直して、また実際にハンガリー人と会って話をして大きくプラスイメージに転換した珍しい国である。

家の応接間のテーブルにお土産で買ったハンガリー刺繍のテーブルセンターが置かれている。懐かしい気持ちになる。都会に行き、イタリアンの店前に掲げてある国旗を見ると、ハンガリーだと思ってしまうくらいにハンガリー鼻真ん中になってしまった。

